

主の 2017 年 9 月 3 日
第 95 号 創立記念号

日本キリスト教団
泉ヶ丘教会
牧師 上田 真由美

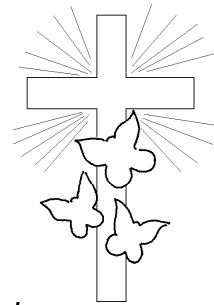
〒590-0114 堺市南区槇塚台 1-1-5
TEL/FAX 072-291-9532
メール izumigaoka9532church
@yahoo.co.jp

■ 礼拝・集会 ■

- ・ 主日礼拝(日)午前10時30分
- ・ 教会学校(日)午前9時
- ・ 聖書を学び祈る会(木)午前10時30分
- ・ キリスト教入門講座・家庭集会
- ・ マリヤ会・テモテ会、他

■ 教会標語 ■

『キリストを証する教会』



キリストを証する
教会の姿

牧師 上田 真由美

堺教会の開拓伝道のため、一九八三年に創立された「泉ヶ丘教会」となりました。三十四年の間、御心がこの地に行われ、神の救いが宣べ伝えられ、多くの人が救われ、神のご栄光が現わされたことを、生ける神の御業と驚くものです。今後も、御業がこの地に生きて豊かな実を結びますように、御言葉から教会の伝道の姿を知りたいと思います。

「イエスは付近の村を巡り歩いてお教えになった。そして、十一人を呼び寄せ、一人ずつ組にして遣わすことにされた」(マコ六・七)。これが主イエスの時代から二千年の間、教会が受け継いで来た伝道の姿であり、これによつ

てキリスト教は生命を得て来たのでした。主ご自身が先立つて伝道された。この事を私たちは当然のように思うかもしれませんが、しかし、当然ではないでしょう。十二弟子をつくられたのですから、ご自分は家において指示し弟子たちに働かせる仕方もあつたはずだからです。わざわざ、主が先立つて働かれたとあるのは、その当然でない大事を思い起こせ、と聖書は言うのでしよう。

先頭に立ち伝道に集中されたのが主のご生涯。その最後は十字架で終わりました。しかし十字架は、最高の伝道だったでしょう。人々の前にご自分の一切を出し、ここに救いがあることを示されたからです。そして、弟子たちはこのお方を伝えたのです、自分の

考えや行なった事ではなくて。また、彼らは伝道する時に、生前の主の伝道のご生涯を想起していたのではないでしょう。そしてそれに続く者であろうとした。それが、彼らの伝道だったでしょう。ですから、私たちが伝道する時も、あのお方を証しする。今日もあのお方が伝道をおやめにならないから、私たちもまた伝道するのです。

次に、「二人ずつ組にして遣わされた」(マコ六・七)とあります。「二人ずつ」とは、一人では一人前ではないということでしょう。この組の中には、ペトロもヤコブも、後に召されたパウロもいたでしょう。彼らは、二人一組になつて遣わされたのです。二人一組伝道というのは、ユダヤ教の風習でした。しかし、それを主がお用いになつた時には、意味が変わつたようです。伝道する者の中には英雄はいない、というように。

昔からパウロのような優れた伝道者たちがいました。しかし彼らは、自分を英雄とは考えなかつた。パウロは、手紙の中で度々、自分とある人の名前(アモテ、シルワノなど)、あるいは自分と教会の名前を一緒に挙げています。つまり彼は、自分を孤立した優れた



た人と考えていなかった。自分の貧しさを知っていたのです。

伝道に行く時に大事なものはそのことでしょう。一人で一人前。自分だけで伝道する必要はない。その意味で、伝道することで私たちが得意になれることは何もない。しかしそれと同時に、伝道することに怖気づく必要もない。自分は自分が受けた恵みを語るのですが、不十分ならば、一緒に行く人に同じように恵みを語ってもらえばよ

いわけです。そして一人でするのではなくて助けてくれる人がいる。その本当の意味は、教会に連なる人全員で補い合つて伝道するということでしょう。それが教会の伝道の姿なのです。

伝道とは本来、人間の力ですることではなくて、神様に導かれてだけることが出来るもの。主から受けた恵みを証しすることなのです。ですから、自分は知識や肩書きがあるから伝道できると考えるならば、滑稽ということになるでしょう。それでは主の恵みを伝えることはできない。自分が、ただ主の恵みによつてだけ生かされていると分かつた時にだけ、その恵みを伝えることができるのです。

最後に、「十一人は出かけて行って、悔い改めさせるために宣教した」(マコ六・一二)とあり、七節に「二人ずつ組にして遣わすことにされた。その際、汚れた霊に対する権能を授けられた」とあります。「悪霊を追い出す」。この言葉は福音書に何度も出て来ます。主の到来によつて、神の国は来た。神の力は及んでいる。だから、弟子たちのすべき事は、「悔い改めさせる」こと。それによつて、人の心の中で神以外の力が退



けられて、神の力が入り支配するようになる。伝道とは、ただ困っている人のお世話をしたり、人間同士の絆をつくったりする事ではない。また、伝道の私たちの力とは、「神の力」であり、制するものは神ならぬ力、「悪霊」なのです。

神様は今、「泉北に立つ」この教会に私たち一人一人を召され、組み合わせて伝道させてくださるうとしています。教会の頭なる主キリストにあつて一つとなり、志を新たにしておいて、その主に従ってまいりましょう。そして、驚くべき神の御業を、また見させていだきましよう。



素朴さが生み出す 神の世界

中山 アイ子

深遠とした針葉樹林や白樺が美しい国・ロシアにある素朴な木造教会を見にキジ島に行ってきました。

フィンランドと国境を接するカレリア地方には、大小6万もの湖や沼が点在しています。そのうちのひとつであるオネガ湖は、世界で2番目に大きい湖で琵琶湖の15倍ぐらいの大きさです。そのオネガ湖に、全長5kmほどの細長く小さなキジ島が浮かんでいます。

モスクワから寝台車「カレリア号」に乗り、カレリア州の首都であるペトログラドヴォーツクまで行き、そこから水中翼船で1時間と少しかけてキジ島を目指しました。6月から9月までの間運行していますが、冬場はオネガ湖

が凍結してしまうので行けなくなります。

988年は、ビザンティンからギリシヤ正教を受け入れ、ロシア人がキリスト教の信仰を知った一大エポックの年となります。南ロシアのノブゴロドからのキリスト教徒の移住者が北ロシアに入ってきて以来、カレリア人はキリスト教(ロシア正教)を信奉するようになります。

カレリア地方は中世以来、ロシアとスウェーデンの争いの場所となり、東方から布教されるロシア正教会と西方から布教されたカトリック教会(のちにプロテスタント)がしのぎを削る前線となりました。スウェーデンとロシアは、カレリア地方を巡って戦い、キジ島の目と鼻の先を国境線が通ることになり、そのため要塞の機能を兼ねた修道院がキジ島に建設されたのです。

1712年、ピョートル1世が率いるロシアの軍隊はスウェーデンに勝ち、ピョートル1世によつて勝利をたたえて、プレオブラジエンスカヤ教会、ポクロフスカヤ教会と鐘楼がキジ島に建てられました。腕利きの大工が設計図もなく建てたという不思議な姿をし



た美しい教会で、ヨーロッパ建築史上の一大記念碑です
そこはまるで、ロシア民話へと誘ってくれるような、静寂で美しい自然に囲まれています。しばらく平坦な緑の台地を歩くと、一際目立つ建物が目に飛び込んできました。22個ものタマネギ型の円蓋をピラミット状に積み重ねた印象的な姿をしたプレオブラジエンスカヤ教会、ポクロフスカヤ教会

と鐘楼の一群です。世界遺産に登録されている木造教会の偉容なほどの美しい姿に圧倒されました。3つの木造建築物の中で最も大きいのがプレオブラジエンスカヤ教会です。

プレオブラジエンスカヤ教会の22の円蓋はすこしずつ形を変えながら上へ上へともち上がっているかのような躍動感にあふれています。また円蓋は美しい装飾としてだけでなく、木造建築にとつて大敵である雨や雪から、建てるものを守る為にも優れた機能を持ちながら全体として不思議な美しさになっています。

雨水は鱗のように幾重にも重ねた板を伝つて下の屋根へと落ち、天に突き出した屋根は湿気を外に出すように設計されています。

名もなき匠の技術は驚異に思いました。この美しい木造建築を一枚の設計図も持たず、斧で伐った木材を釘ひとつつかわずに組み合わせる建てるのです。

素朴さが生み出す神の世界です。プレオブラジエンスカヤ教会は、夏専用の教会で、短い夏の間の特定の日のみ、ここでミサが行われてきました。



プレオブラジエンスカヤ教会

隣のポクロフスカヤ教会は9つの円蓋を持ち、プレオブラジエンスカヤ教会の美しさを引き立たせる役目もあり、また存在感もなくてはならず、試行錯誤を繰り返しながら、調和の取れた美しい教会となりました。

冬になるとカレリア地方は、雪で覆われ寒さの厳しい環境に変わります。そうした状況での礼拝は難しくなり、冬季専用の教会が建てられ、ペチカ（暖房）も備えられています。

ロシアでは夏季専用の教会と冬季専用の教会が造られることが多いと聞きました。

ロシア独特の玉葱の形をもったキュープラのあるロシア正教会の原型は、ここキジ島から始まり、石造りの教会へと引き継がれていきます。

現在は島に常駐される司祭はおられず、冬至と夏至の年2回だけミサが行われているそうです。

プレオブラジエンスカヤ教会は老朽化が進み、湿気による木材の変形、虫や鳥などの被害もあって、崩壊必至といわれてきましたが、現代の技術をかき集めても、設計図も無く、複雑な造りの高度な職人技は大工を近づかせません。世界中の技術者の協力を得て、ようやく保存への道が開かれてきているそうです。

教会は神さまの家であり、教会の壮麗さは、天国の地上における体現だと思いました。

ロシア正教の祈りとコーラスの礼拝

アレキサンドルは、スウエーデンとの戦いでロシアを勝利に導きました。キリスト教を守護した聖人として、アレキサンドル・ネフスキーの称号をもち、アレキサンドル・ネフスキー修道

院の聖堂に眠っています。

夕方5時からミサが始まると、鐘楼から鳴り響く鐘の音が20分ぐらいつづきます。ロシアでは22個以上の大小の鐘でメロディーを奏するのが常です。ミニ・コンサートのような鐘が始まると、人々はスカーフを取り出し、足早にアレキサンドル・ネフスキー修道院の門をくぐり、十字を切り、頭を垂れて聖堂に入って行かれました。

旅人の心を癒していたらこうと私も、ロシア正教のミサに初めて出ました。信仰に生きるロシア人のひたむきな姿を見て、初めての経験に少し緊張しました。

聖堂の小さな明かり窓から差し込む日の光も弱々しく、薄暗いドームの中は、神秘で荘厳なイコノスタシスが信者の献納するロウソクの光に、神々しく照り映えています。たくさんのイコンで覆われたイコノスタシス(祭壇部と一般信者席と分ける聖障壁)の王門が開き、まるで外界とは無関係のようであごひげの豊かな長身の主教が朗唱するように祈祷が始まりました。

ロシア正教特有の磨き抜かれた聖歌隊の力強く美しいコーラスの響きが

聖堂の中にこだまし、とても印象的でした。何度も十字を切り、頭を垂れる信者の祈る姿が忘れられません。ロシアの霊的世界を実感しました。ロシアの聖歌隊は、パイプオルガンはなく無伴奏です。人間の声の素晴らしい低音の響きにつつまれた祈りとコーラスの礼拝です。

椅子は備えてありませんので、座るのに慣れていません私には4時間ぐらい立ったままでのミサは、厳しいなと思いました。

パイプオルガンを用いないのは、人間の声のみで、神さまと直接交わるべきであるというビザンティン典礼の理念によるそうです。

ロシア正教教会の壮麗なイコノスタシスを、沢山見てきました。中央の王門が開かれて主教が厳かに信者の前にあらわれる姿に、ロシア正教の歴史を感じました。

礼拝中に、信仰に生きたイコノスタシスを初めて見る事が出来、私の知らない世界を垣間見るようで嬉しいでした。

イコンを通して聖なる者と接触する純粋な祈りに生きるロシアの人々を見てきました。

十字を切つて頭を垂れ、アレキサン
ドル・ネフスキー聖堂を出ました。
ロシアの夏は白夜です。夜10時を
過ぎてても太陽は沈まず明るいです。
旅の初めから終わりまで導き、お守
りくださった神さまに心から感謝し、
聖なるロシアに別れを告げました。Ω



毎週聴く神様のお言葉は、

いつも新鮮

村田 幸子

50年住み慣れた泉北の地、槇塚台から引越して、ここ北区の百舌鳥八幡にやってきました。百舌鳥八幡の街にも、引越した家にもかなり慣れてきた。比較的何にでも順応する性格なので、狭くてもあまり苦にはならないし、毎日を楽しんでいる。

洗礼を受けてから、何年になるのだろうか？

毎週普通に、何にも邪魔されることなく教会に通って、神様の御言葉を聴き続けてきたし、これからも聴き続けることになるが、何年間聴き続けてきて、これから何年間、今まで以上

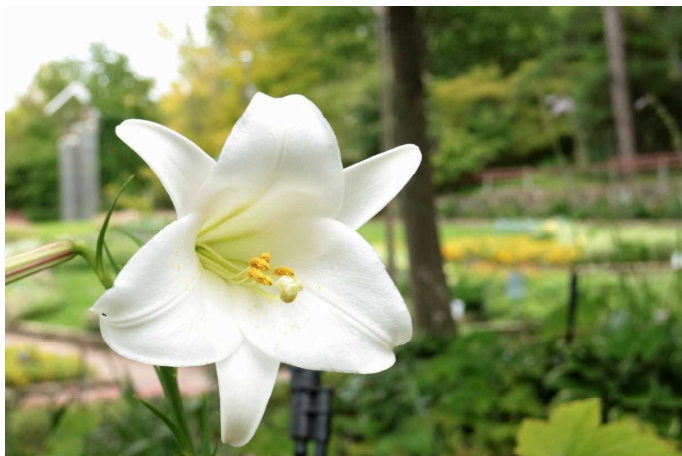
永く聴き続けることになるのだろうか。

私は、自分の年齢を気にしない。何年この世に生を受けてこの地球上に住み続けているのだろうか、またこれからも何年住み続けるのだろうか。神様だけが存知である。すべてを神様に委ねている私である。

教会で新しく生まれてキリスト者として育ってきた私は、何年間？ということを考えない。毎週聴く神様のお言葉、私にとっては、新鮮に受け、そして聴く。

神様は、繰り返し同じ聖書の箇所をお与えくださる。それはいつも新しく与えられた、今日の個所として感謝して読みそして聴く。疑問に思ったことはない。神を信じるノウハウはない。素直に受け入れて行くこと、謙虚に受け入れて行くこと、感謝して受け入れたとてつもない大きな愛を受け入れるだけである。

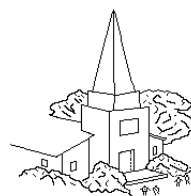
そんな時私は、いつも神様に感謝している。神様からいただいた愛は自分だけにとどめないで、みんなに分け与



えるのである。

自然や、花たちを見ればわかる。神様の愛をいっぱい受けて、シーズンが来ると恩返しとして美しい姿を見せている。シーズン、シーズンを新鮮に受け入れて咲いているのだと思う。写真を撮りながら、神様の愛を感じている私である。

Ω



みことばマヨネーズ

岸本 眞

私たちは、食物を口に入れ食べるときには息を止めています。歩いているときには躓かないように足元の地面を意識することはありません。誰かと話しているときも、何をするときも、実はそうしようと思うよりも前に、私たちは意識しないでそうしてしまっています。

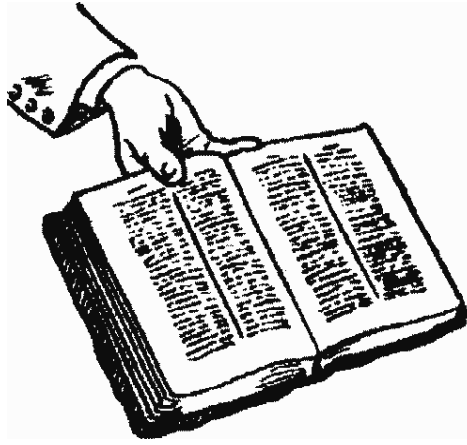
米国のある脳研究者は、意識とはすでに決定された物事を認識して、それを自分が行ったと主張するだけの受動的な機械に過ぎない、実際はすべて無意識下で動いていて、意識という働きは思ったよりも物知りではなく思慮深くもない、という難解な説を唱えています。人は自分の行いや言葉を思うままにコントロールできていると錯

覚していることにさえ気づいていない、ほんとうに愚かな存在だと、脳の研究からも知らされます。しかし聖書は、自分で自分を自制できないだけでなく、ましてや自分の人生を望むままに過すことなんてできないんだということを、自分ではぬぐい去れない「罪」という言葉で明らかにしてくれています。

「見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。しかし、今、『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る。」(ヨハネ福音書 9:41)

このことを「意識」という、わかったようでわからない言葉でいうよりも、「思い」という言葉に置き換えてみると、案外私たちの日常は、考えて行っているというよりも「思うよりも前に、思わず?動いているとか口走っている」ということなら実感できるのではないかと思えます。

突然に卑近な私たち夫婦のことで大変お恥ずかしいお話なんですが、我が家では妻はよく私に話しかけてき



ます。たくさん話しかけてきます。それに反して私は、家では必要だと思ふことしか話さない無頓着な男です。で、「なんで話さない！」と、よく叱られます。人が誰かのことを理解して親しく交わるためには、言葉と行いを通さないといけないとわかってはいるのですが、「黙っていてもわかるでしょ？」と、つい手前勝手な思いから黙っていることが多いことを、密かにちよつとだけ反省しています。

聖書は語っています。

「わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。」(ローマ書 7・15)

「わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。もし、わたしが望まないことをしているとするれば、それをしてるのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。」(ローマ書 7・18 - 20)

「言うことで伝えたいこと」と「言うてはいけないこと」の間のさじ加減はほんとうに難しいなあと痛感しています。

「自分の口を警戒する者は命を守る。いたずらに唇を開く者は滅びる。」(箴言 13・3)

「自分は信心深い者だと思つても、舌を制することができず、自分の心を欺くならば、そのような人の信心は無意味です。」(ヤコブ 1・26)

「口に入るものは人を汚さず、口から出て来るものが人を汚すのである。」「口から出て来るものは、心から出て来るので、これこそ人を汚す。」「マ

タイ福音書 15・11、18)

水と油は溶けて交われないのですが、進んで話すことで通じ合う交わりの豊かさを水に喩えて、言つてはいけないことを油に喩えるとしたら、私たちは、いつも知らず知らずのうちに水と油をいっしょくちやにして交わっていることに気づいていないのかも知れません。世間には水と油が溶けて混ぜられるように、洗剤やマヨネーズやアイスクリームに使われている「乳化剤」という優れたものがありますが、私は礼拝を通じて語られる聖書の御言葉は、ひよつとして気づかないうちに自分の中で別々にがんこに分かれて対立している、隣人を「愛する思い」と「裁く思い」という水と油を、信仰の交わりの中でみごとに乳化して、おいしいマヨネーズになるようにと働いて下さっているんじゃないかと思つたりします。

聖霊が臨み聖書が語るみ言葉は、自分本位からくる、「語るべきときの沈黙と、語つてはいけないことを語つてしまふ思慮のなさ」、「愛したいのに裁いてしまふ」ことの両方の、自分ではまるで気づかないでいる無意識さ

えも支配している根深い罪を、見事に明らかに示してくれているように思います。聖書を通して示される神様の言葉は、そんなふうには罪の底に住むことを、ついに反して望んでしまう私たちが、罪赦されて御言葉に生き生きと生きる者の「傾聴する沈黙」と「節度ある語り」を身に纏い、主イエス・キリストに支えられるほんとうの豊かな支え合いと交わりの中に生きるための解決策を教えてくださいという意味で、聖書の語る御言葉は、生活の中の語らいを円滑にしてください、まるでおいしいマヨネーズのようだと言えば的外れでしょうか。

「だれでも、聞くのに早く、話すのに遅く、また怒るのに遅いようにしなさい。人の怒りは神の義を実現しないからです。だから、あらゆる汚れやあふれるほどの悪を素直に捨て去り、心に植え付けられた御言葉を受け入れなさい。この御言葉は、あなたがたの魂を救うことができます。御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になつてはいけません。」(ヤコブ 1・19-22)

「無慈悲、憤り、怒り、わめき、そしり

などすべてを、一切の悪意と一緒に捨てなさい。互いに親切にし、憐れみの心で接し、神がキリストによってあなたがたを赦してください。さうしたように、赦し合いなさい。」(エフエソ 4・31-32)

私たち泉ヶ丘教会の群れは誰ひとり例外なく、神の御子、主イエス・キリストの十字架を通じた赦しと復活の力を信頼し、自分では気づいていない罪をも赦して下さった神様の支配の中に入れられることを心から喜び待ち望み、そして語ります。

34年前に神様が祝福されて泉北のこの地に泉ヶ丘教会を建てて下さったことを思い起こし、今日から再び神様を礼拝し、祈りを合わせて、讃美を口ずさみ、御言葉にならない、御言葉を真似て、御心に叶う礼拝生活を送り始めましょう。

みことば「まねようズ」!

Ω



各教会間の 信仰の交わり

時武 哲也

中高生ひつじ会は、近隣の6教会が合同で行っている中高生の修養会で、今年も小学6年生も参加しました。

日曜日の朝それぞれの教会で神様に礼拝をお捧げし、午後より泉ヶ丘教会を会場として行われました。今年も神様が導いて下さり開催出来ましたこと感謝します。

今年も宗教改革500周年を記念して「信仰のみで良いのです」と題し、岸和田教会の吉本幸嗣牧師の講演で聖書の御言葉をわかりやすく一人一人に語りかけて下さいました。

プロテスタント教会とカトリック教



会はどのように違うのか。マルティン・ルターがローマカトリック教会のあり方に疑問を投げかけ、宗教改革によって生まれたのがプロテスタント教会。私たちの教会はプロテスタント教会に属し毎週礼拝をお捧げしています。講演では宗教改革の三大原理についてお話しして下さいました。

一つ目は「みな祭司」

礼拝では牧師も教会員も階級や区別はありません。主の十字架と復活を信じイエス様のお名前によってお祈りするなら、祭司イエス様によって「だれでも小さな祭司」として教会に仕え礼拝をお捧げし神様から与えられている賜物を用いてキリストを証します。

二つ目は「聖書のみ」

異教の東の国の学者たちは、光り輝く特別な星に導かれお生まれになった救い主キリストを拝みに来しました。しかし彼らはベツレヘムではなくエルサレムに向かいます。新しい王様はエルサレムの都でお生まれになったに違いないと思っただからです。しかしそこに赤ちゃんイエス様はおられません。エルサレムで祭司たちに「旧約聖書の預言者の言葉」を教えられ、ベツレヘムでお生まれになったことを「この時知る」のです。神様の御心を知り、救いへと導かれる大事な教えは「聖書のみ」に書いてあるのです。

三つ目は「信仰のみ」

エルサレム神殿でのファリサイ派の人



と徴税人の祈りを通して、イエス様は「ファリサイ派の人はユダヤ教の掟を一生懸命守って真面目に生きている人です。」

彼は祈ります。「正しく生きることが出来て感謝します。」この人はどのような思いで祈っていたのでしょうか。私は正しい者だ。私は神様から正しいと言われて当然だという態度。うぬぼれ高ぶる罪深い心。この姿は神様を軽んじる不信仰な姿です。

それに対して徴税人はどうでしょうか。ローマ帝国の手先になってユダヤ人の仲間を裏切り、税金を取り立て仲間を苦しめて生きています。自分でもどれほど罪深いか十分分かっています。頭を垂れて「神様、罪人の私を憐れんで下さい。」もうあとの言葉は続きませんでした。

神様が正しい者として認めて下さる



た、義として下さったのはどちらでしようか。ファリサイ派の人ではなく徴税人の方でした。神様をひたすら信じ、罪深いありのままの自分を神の御前に投げ出して祈る徴税人の方が罪赦され救われるとイエス様は言われたのです。信じるだけで良いのです。講演が終わると次に、講演内容について考え話し合う分団へとプログラムは進みます。

当初は2つの分団に分かれて行う予定でしたが、予定していた人数より少なかった為急きょ1つの分団で行うことになりました。各分団の若きリーダーとサブの方は、かなり準備をして臨まれたのでしよう。すぐにみんなの気持ちをこの場へと導き、一人一人の声に耳を傾けながら、自分たちの信仰を語り、分かり易いたとえを入れながら進めていかれました。

この時間は中高生が御言葉を自分の事として考える良い機会になりました。神様は若きスタッフを用いて中高生の心に御言葉のタネを蒔いて下さいました。

続いてレクリエーションでは2つのグループに分かれ、体を動かし頭の体操をしながら対抗ゲーム。中高生もスタップも笑顔いっぱいの良い交わりの時を持ちました。

体と頭をフル回転し、リフレッシュした後は、いよいよ夕食作りです。メニューはハヤシライスとサラダ、それにカナッペ付きです。普段家庭で料理を手伝っている人も、そうでない人もみんな協力して作ります。

一番の難関はハヤシライスには欠かせない大量のタマネギ切り。作業を始めるとあっという間にタマネギのミストが部屋に充滿し、みんな目をシヨボシヨボさせ悪戦苦闘!! しかしこの時間を無事クリアすると作業は順調

に進み、ついにハヤシライスの完成!! スペシャルディナーの出来上がりです。味は本当にスペシャルで美味しく頂きました。

ハヤシライスを作っていた時、横の



テーブルでは中高生がカナッペ作り
に挑戦していました。用意された具材を
うまくトッピングしながら見事な仕上
がり。完成度バツグンの作品になりま
した。私は写真係で迷(？)カメラマン
ですが、私の撮影でも、とっても美味し
く見えます。どうぞこの出来栄をご
覧ください。※カラーでじっくり見た
い方は泉ヶ丘教会のホームページをク
リック!!

2時から始まった中高生ひつじ会も
夜の8時に。あつという間にすべての
プログラムが終了しました。

程よい疲れを覚えながらも、中高生
の笑顔を見てると今年も開催出来
て本当に良かったと実感しました。
「神様これからもこのひつじ会を6教
会の働きを祝福して下さい。」と願
いつつ家路に向かう一人一人を見送
りました。

同年代の中高生が各教会を超えて
交わり学ぶ環境を神様は与えて下さ
っています。この貴重な機会を通して一
人一人の信仰が養われイエス様にしっ
かりつながって信仰告白へと導かれま
すように。神様のお導きを祈ります。

Ω

泉ヶ丘教会創立 34 周年を覚えて

私たち泉ヶ丘教会は、神様からのご委託を受けて、そして母教会である堺教会の支援の下で輝く教会堂を与えられ、泉北ニュータウンへの伝道を続けています。ここに集う人々は、毎週捧げられる喜びの礼拝に押し出されて、この地に主の御言葉の種を蒔き続けています。今春からは、新しい牧者である上田真由美牧師が与えられました。私たちはこの創立の喜びの日を、教会員一同で恵みの主に讃美しつつ、新たな一年を歩み出します。教会の伝道文書である教会報「マナ」を読まれた方で、一度礼拝にいてみたいと思われた方は、どうぞ教会にお越し下さい。ご一緒に、主の深い赦しと大きな恵みに感謝する礼拝を捧げましょう。

< 泉ヶ丘教会の歴史 >

- 1971年 堺教会「開拓伝道研究委員会」発足、土地を取得。
- 1973年 堺教会泉北ニュータウン伝道のための堺教会分離礼拝開始。
- 1983年 日本基督教団「泉北・槇塚台伝道所」として教団認可創立。
- 1996年 日本基督教団「泉ヶ丘教会」に改名。
- 2000年 現在の新会堂・牧師館完成。
- 2017年 現在に至る。

